

シーニックハイウェイ北海道の挑戦

シーニックハイウェイ北海道への取り組み



北海道においては、雄大な自然・農村景観、温泉、食、ドライブなどを目的とする、個人型観光、特に道外からのレンタカーを組み合わせた旅行商品が増えている。

これらレンタカー等を利用した自由度の高い個人型観光の魅力は、雄大かつ豊かな自然、美しい農村景観、豊かな食材、数多くの温泉など

多彩な観光資源を個人のニーズに応じて巡ることが可能である点であろう。これら個人型観光のニーズに的確に対応し、地域固有の資源の保全、発掘または創造により、個性的な美しいツーリング環境を創出するためには、地域の住民、企業、行政各々において、広範かつ連携した取り組みが必要となる。

このため、国土交通省北海道局では、米国において1990年代から地域住民、NPOなどが原動力となって観光振興、景観・環境の保全に取り組んでいるシーニックハイウェイプログラムの日本への導入の可能性を検討するため、平成15年度から北海道において2年間試行を行い、17年3月から本格的に制度として運用することとした。

取り組みの背景と目的

北海道は国内外を問わず人気の観光地であるが、その目的は、景観「温泉」「ドライブ」「食」が主となっている。道内のレンタカー事業者数は近年増加傾向にあるとともに、毎年行われている「道の駅」スタンプラリーも10駅以上押印の応募者数が約5万人、全駅完全制覇者が約9千人とドライブ観光へのニーズの高さを示している。

このような中、北海道では平成13年10月に「北海道美しい景観のくじり条列」及び「北海道観光のくじり条列」を制定、「花大陸Ecosystem」などの地域資源の発掘及び創出も進められるなど、旅行目的の一番に位置付けられる「景観」の保全・活用や観光振興に対する取り組みが活発に行われるようになってきた。

北海道におけるシーニックハイウェイの目的は、地域住民・NPO等と行政が連携し、沿道景観の改善、農村風景の維持など、「美しい景観づくり」、地域固有の資源の発見、保全・活用等による「活力ある地域づくり」、地域情報発信や景観ポイントの紹介、新たな体験型観光等

による「魅力ある観光空間づくり」に取り組む、そこに住む人々にとって愛着と誇りを持てる地域環境を創出するとともに、訪れる人々にとって安全・快適な観光空間を提供し、美しく個性豊かな北海道を実現することである。

景観、観光、地域という取り組みは一朝一夕で実現するものではなく、その目標も時代の要請により変わっていくことから、その運用にあたっては、地域からの発案を重視、地域住民や行政が各々持続的に取り組めるような運営体制・支援組織の構築、地域が自立するための地域ビジネスの創出、関係機関、団体間の連携の仕組みづくりへの支援、地域自らの固有の資源の発掘・創造（文化、教育など）、評価・診断の取り組みを重要としている。

モデルルートを指定して試行

平成14年度の国土交通省重点施策を受け、米国のシーニックハイウェイプログラムの実施状況調査を経て、15年2月に「北海道におけるシーニックハイウェイ制度導入モデル検討委員会」（委員長石田東生筑波大学教授）を設置。米国とはボランティア活動の歴史、活動への企業からの寄付、行政システムなどが大きく異なることから、15年4月に試行的に2つのモデルルート（旭川〜富良野・占冠間、千歳・支笏〜洞爺・ニセコ間）を指定し、15、16年度の2年間、シーニックハイウェイの取り組みの趣旨に賛同する活動団体を募集し、次のような事項について実験的な取り組みを行った。

- 制度推進の仕組みづくりに関する事項
- 地域住民主体の運営体制づくり
- ブランド形成、地域ビジネス創造
- 持続的サポート体制の仕組みづくり
- ルート運営の活動内容に関する試行
- 景観資源、地域資源（文化、歴史、自然、レクリエーション等）の保全・活用



羊蹄山（喜茂別町）

その場を通して景観や情報発信の分科会が設置され、複数団体が連携して活動を行う体制が確立された。さらにルート全体としての方針を検討するルート代表者連絡会議も設置され、各団体が連携し



景観ポイント（上富良野町）

・個別活動及び連携活動
制度施行全般に対する評価
活動団体数は平成15、16年度の募集で38団体が参加し、参加申請時の活動内容は沿道の植栽等の景観保全活動、情報発信や体験型観光の実施等の観光振興活動など多岐にわたった。
個別活動の一方で、各団体間のルート全体の取り組みに関する意見交換の場としてワークショップを開催した。



道路景観診断（千歳市）



モデルルートの位置

て取り組む枠組みづくりへと発展した。
集中活動月間の実施

平成16年度には、個別活動団体の連携の可能性を検討するため、9月4日、10月3日までの1ヶ月間を「集中活動月間」として個別、連携活動と同じ時期に実施するとともに、活動団体が推薦する景観の良いところにシーニックバイウェイ景観ポイントや地域固有の情報を入手できるシーニックバイウェイ情報拠点をルート上の「道の駅」とともに設置（仮設）し、新たな景観資源の発掘、情報発信に取り組んだ。また、地域への普及啓発活動の一環としてフォーラム・フォトコンテストなども開催された。

試行の評価

2年間の試行の評価として、各活動団体代表者及びメンバーにアンケートを行った結果、「新たな団体の交流が生まれた」、「単独ではできなかったような活動が可能となった」などの連携の効果を実感する回答が多く出された。

また、集中活動月間の取り組みに対して民間企業の協賛が得られたり、地域との連携に着目した旅行会社、レンタカー会社等から今後の連携の提案があるなど、新たな観光需要の増加への期待が持たれた。

シーニックバイウェイ制度の本格的展開に向けて

2年間の試行で得られた知見を踏まえ、検討委員会報告が取りまとめられ、これを受け平成17年3月から「シーニックバイウェイ北海道」がスタートすることとなった。

シーニックバイウェイ北海道のルート指定は、全道的な行政機関、経済団体等から構成される「シーニックバイウェイ北海道推進協議会」を設置し、17年3月11日より地域からのルート運営活動計画の提案の募集を開始した（随時受付）。

これまでのモデルルートも含む各地域は、シーニックバイウェイに取り組みとする団体（複数）がその代表者会議において活動方針となるルート運営活動計画を作成し、市町村長の意見を付して推進協議会へ提案する。

また、活動計画策定前の段階においても、複数の団体によりシーニックバイウェイの取り組みを行うおとするエリア・ルート案を「候補ルート」として提案を受け付けることとしており、指定された場合、これまでのモデルルートと同様に新たな活動団体の募集、代表者連絡会議の設置、ルート運営活動計画の策定等の取り組みが始まる。

3月31日までに提案されたルート運営活動計画については、今後、学識経験者等による審査委員会の意見を聴きルートを指定し、公表する。また、地域においてルート計画を策定するまでには相当の期間を必要とするが（モデルルートでは約2年）、この期間が地域における合意形成等に重要な時期となる。このため、持続的な運営となるよう、活動団体、行政が連携できる支援体制を確立することとしている。

2年間の北海道におけるシーニックバイウェイの試行の取り組みは、数多くの地域の方々の参加と協力のもと、当初想定していた以上のさまざまな取り組みが実施され、高い評価を受けている。

シーニックバイウェイの取り組みは、「自宅に客を招く際に、掃除し、飾り、得意な料理を提供するもてなしの気持ち」を地域全体で共有することであり、行政も含め、息の長い取り組みが必要である。

国土交通省北海道開発局建設部道路計画課

シーニックバイウェイホームページ

<http://www.scenicbyway.jp/>